

入試の英単語と学習法を巡って

小林 功



1 長文の頻出テーマは変わったか

入試に頻出するテーマは、依然として、言語・教育・歴史、そして日常生活に関するものなどである。人間とロボット、クローン人間の正当性などといった時宜を得た話題も出題されているが全体から見れば微々たるものである。このことが何を意味するかは明白である。出題される英文のテーマが変わっていないということは、長文で用いられている単語もほとんど変わっていないことを意味している。実際にそうなのかを確認するために、1982年度の入試問題1000題と2002年度の入試問題1000題を無作為に選び、WordSmithというソフトを使って分析・集計してみた。その結果は、予想通りであった。長文で用いられている頻出単語の間に有意な差は全く何も見られなかったのである。つまり、中高の教科書で学習する単語の範囲がどうであろうが、また、新学習指導要領に変わろうが、入試に出題される頻出単語はこの20年間（あるいはそれ以上）ほとんど変わっていないというのが実態である。したがって、中高で学習する単語数が少なければ少ないほど、入試の語彙レベルとの差が大きくなり、それだけ受験対策のための負担が大きくなるわけである。

2 単語力をどう養成すべきか

それでは、入試レベルの単語に対応するには受験生はどういう学習をしなければならないのか。真っ先に思いつくのは、単語集で覚えるというやりかたである。しかし、この学習法は手取り早

いように最も効率の悪い学習法である。たとえば、次のような句があるとする。in our enthusiasm over our progress in knowledge and power (大阪大)。enthusiasmは「熱意」という意味で、progressは「進歩」という意味だから、この句の訳は「知識と力の中における私たちの進歩の上にある私たちの熱意の中で」で良いとする受験生は意外に多い。もちろん、初めは直訳でよいが、その訳が何を言おうとしているのか分からない場合は、たとえば、「知識と能力を伸ばすことに夢中になるあまり」とか訳した方がよくなるということを考えてもみないのである。うまく訳せなくても、せめて何とか分かる日本語にできるようにするには、単語の意味の足し算ですませるのではなく、全体で何を言おうとしているのかを考える習慣を身に付けなくてはならない。そのためには、単語だけで学習してはだめである。

3 できるだけ大きな固まりでとらえる

先日こんな質問をしてきた浪人生がいた。「先生、前置詞をどう訳したらいいのかわからなくなる時があるんですが、どうしたらいいんですか。」どういうことを言っているのかと尋ねると、in response to～という表現のことだった。つまり、in+response+to ととらえて、inをどう訳したらいいのか、はたと困ってしまったわけである。こういう疑問を抱く学生の共通点は、

- ①辞書を見ようとししない（辞書に熟語として載っている）
- ②個々の単語の意味さえ分かっていたら、足し算

で何とか分かるはずだと思っている

③英文を読み慣れていない

などである。個々の単語でとらえるのではなく、できるだけ大きな固まりでとらえる習慣を付けるべきである。たとえば、上で挙げた句に出てくる progress in～も、progress+～ではなく、progress in～という固まりで「～が進歩すること」とか「～が上達すること」という意味だと分かる方が、読みが速く、正確になり、文法問題も解けるようになる。existence という語の場合にも同じようなことが言える。「existence＝存在」とだけ覚えておけばそれでいいと思っている学生が多い。しかし、入試問題には human existence という表現が結構出てくるが、このままの形が辞書に出てくることは少ない。文脈によって「人間」となったり、「人間の生活」となったり、場合によっては「人生」と訳した方がいい場合もある。したがって、human+existence というよりは、human existence という固まりでとらえたほうが良い。

4 英語力はまず語彙力からという考えをやめる

よくある誤解は、語彙力→文法力→熟語力→構文把握力→英文読解力のような段階を経てこそ英語力が付くという考え方である。しかし、これではいつまで経っても読解力は身に付かない。なぜなら読解力養成を本格的にできる時期がなかなかやってこないからである。最も好ましいのは、理解度がどの程度であるにせよ、とにかく英文を読むことである。英文を読みながら、単語、文法、構造把握、熟語などをそのつど押さえて行くべきである。初めはあちこち分からないことだらけでも、何度も見直し疑問点を少しずつ解決していけばいいのである。

5 単語テストのやりかた

授業前に、単語テストを実施している学校が多いと聞く。しかし、果たしてその効果はどうだろ

うか。また、「英語学習＝単語の勉強」という誤解を与えやしないだろうか。確かに、読解力は語彙力と密接な関係にある。しかし、だからといって単語の意味だけをテストするのは好ましいとは言えない。それでも実施せざるをえないというのであれば、たとえば、5行程度の英文中の5～10語くらいに下線を付けて意味を問うというやりかたでどうだろうか。あるいは、文脈によって意味が変わる単語を並べてその多義性を意識させるのも良い。

6 単語だけで学習しても効果が期待できる場合

単語集で学習するのは効果的・効率的と言えないが、抽象度の高い語や一部の多義的でない語に関しては、単語だけで学習させても悪くはないと思われる。たとえば、次のような場合である。

【例】-logy / -ology は、「学問」とか「言葉づかい」という意味だ。この接尾辞を含む語をまとめて覚えよう。

- anthropology「人類学」・theology「神学」
- mythology「神話学」・psychology「心理学」
- biology「生物学」・sociology「社会学」
- physiology「生理学」など。

こういう整理の仕方をしておけば、たとえば、planetology（惑星学）という語が出てきても、学問名ではないかと予想できるようになる可能性がある。

（こばやし いさお・河合塾講師）

●大修館版〈単語・熟語〉教材のご案内

ジーニアス英単語2500 改訂版

ジーニアス英熟語1000 改訂版

ジーニアス基礎英単語・英熟語1440

（新書判・本体価格各1000円）

語法問題に万全の単語集と「出題のされ方」に着目した熟語集。
